

## 動物からのメッセージ

小松 守<sup>†</sup> (秋田市大森山動物園園長)

秋田市にある大森山動物園は緑に包まれた自然豊かな大森山公園にある。愛称は「ミルヴェ」。秋田弁で何かを「見ようか!」という時に、「見るべえ」と言うが、その語呂に引っ掛けて市民が付けてくれた。私はこの動物園に獣医師として奉職し、約35年もの長い間お世話になっている。近年、動物園には都市の観光資源としての役割、こどもの豊かな心を育み人間形成の場の一つとしての教育の場、さらには希少動物の種保存と地域の自然環境との関わりなど、多様なものが求められている。私はこうした役割のほか、動物園は人々の心を癒す場であってもいいのかなと考えている。現在、ミルヴェのテーマを「動物と語らう森」としている。感情移入がしにくく、忙しく、悩み多き時代にあって、生き物、特に動物が人に与える力は大きく、心をほっと解きほぐしてくれるように思える。動物園はそこに入った時、動物と話ができるような、心ませ、やさしくなれるような空間でもありたい。

さて、これまでの動物園経験を通して、たくさんの動物との出会いと関わりの中、様々なことを経験してきた。動物園での動物飼育と獣医診療は、迷いと挑戦そして試行錯誤の連続である。動物の死に直面し、何度、悲しみや挫折感、あるいは無力感を味わったであろうか。しかし、動物に元気な赤ちゃんが生まれたときなどの喜びは、これまでの苦労も忘れさせてくれる。動物たちには実に様々なことを教えられ、気づかせてもらった。いわば、動物たちは私の恩師でもある。

人と動物を単純に比較し、また同じレベルで論じることは無論できるはずはない。しかし、動物の生き方を見て人とどこか重なるところが多いことに気づかされる。特に、動物が命をつなぐ行為、すなわち子育てを見るたびに、根本にある大切な部分は何も変わらないのだなと考えるようになった。むしろ、複雑でめまぐるしい変化の渦に巻き込まれているような現代社会にあって、人は、動物が命をつなぐときの大切にしている何かを時に忘れ、見失いかけているような気がする。動物の子育ての方が、実に淡々と気負いなく、しかし、大切な根本にあるものを失わずに行っているように思える。人のように悩みがない分、楽だと言ってしまうまでもうだが、動物たちは命がけて懸命に子育てをする。

春の出産シーズンには子ザルもたくさん生まれる。サルたちの子育てを見ていると、当たり前だが、他の動物と比較にならないほど人のそれに似ている。母ザルは自ら赤子を取り上げ、なめてあげ、指でやさしく胎幕を取り除き、子ザルを抱きしめようとする。子ザルは母ザルになめられ、触れられて勇気と生きる力をもらう。これに対して子ザルも母ザルの愛情に応えようと懸命に母にしがみつこうとする。ついには胸をまさぐり、乳を捜す。母ザルと子ザル、互いにかみ合い、呼応しながら一連の流れで絆を紡ぐ様子は、実に神秘的にさえ思えてくる。抱かれる子ザルと抱く母ザルは一体化し、子ザルは胎内にいるのと同じ扱いに見えてくる。母と子で紡ぎ合うこの時間は子ザルにとって何ものにも代えがたいものである。全身で母の愛を受け、母を感じ、生きようとしている時間である。

ずっと以前、私がまだ新米獣医師のころ、生まれたばかりで育児放棄された子ザルを人工乳で育てたことがあった。できる限りのケアと愛情を注ぎ、懸命に育てたのだが、子ザルの異変に気づいたのは2~3カ月後のことであった。肉体的にはそれなりに成長したが、なぜか子ザルの情緒は不安定であった。私たちが、自然のリズムで、母ザルと同じふれあい、愛情を子ザルにあげることができなかったことが大きな原因と考えられた。

自然のリズム、母の愛情の大切さを改めて感じる。動物は自然の生き物、自然のリズムから逸脱しては生きていけない。母ザルが子ザルを懐に抱き育てる様子を長年見続けて、その仕組みの絶妙さに驚くばかりである。人の育児とも重なって見える、この当たり前の行為を考えてみた。

## 小松 守

## —略 歴—

1975年 帯広畜産大学卒  
1975年 秋田市大森山動物園勤務  
1998年 同園園長



<sup>†</sup> 連絡責任者：小松 守 (秋田市大森山動物園)

子ザルは当たり前のように母ザルの胸に抱かれるが、それは何故であろうか。子ザルが母ザルの鼓動がよく聞こえる胸に近いところで安心するからだと言われる。それは間違いのないことであろう。しかし、人工保育での苦い経験から思うのだが、子ザルは全身でたっぷりの母ザルのスキンシップ（愛情）を感じていたいのではないだろうか。感受性豊かに生まれる多感な赤ちゃんザルは胎外に出された瞬間から不安の塊のはず、母ザルは子ザルを胸に包み込まなければならないと身をもって知っているであろう。サル類の乳房が胸に位置するのもそのためであろう。胸に抱かれて子ザルは絶対的な安心感を得ることができる。サルの乳房の位置が胸に移動した要因の一つかもしれない。なぜなら動物の乳房の位置は子育て様式によって千差万別だからである。

さらには、胸に抱かれている子ザルのポジションは母ザルを見る特等席でもある。子ザルは、母の動き、振る舞いを四六時中、見続けることになる。高度な社会生活を営むサル社会では生きていくのは大変である。子ザル

に母ザルの生き方すべてを見せようとしているようだ。これも自然が仕組んだ巧妙なシステムと言えよう。動物の乳汁の濃度について記載した文献を見て、サル類（人も同じ）の乳汁のタンパク濃度が低いことがわかった。これは子ザルの成長に長い時間をかけようとした結果なのかもしれない。難しい社会で生き抜くため、母ザルの懐でゆっくり時間をかけ成長させ、じっくり母ザルを見せ、教育しようとしているように思えてくる。命をつなぐため、見えない自然の仕掛けが巧妙にセットされているようだ。

当たり前、何気なく見えるこうした自然の仕掛けを時に思い起こしてみることも必要ではないだろうか。当たりのことが当たり前でなくなったとき、考えられないようなことが起きてしまっている。昨今の人間関係、家族関係の希薄さ、また母子にまつわる痛ましく悲しい事件を見るたび、考えさせられる。こうした時代だからこそ動物からのメッセージを自分なりに伝えていきたい。それが師である動物への恩返しと信じて。